批評・紹介

矢野仁一著 東洋史大綱

矢野博士は先年國民教育の見地より國民東洋史大綱を著はし一般讀書界に贈られたが、昨年春に改正された高等學校、中學校の東洋史教授要目を參考し、前著に多く補訂を加へて出版されたのが、本書東洋史大綱である。昨春の要目改正は、滿洲事變後我國の東洋に於ける地位の重大化、我國と東洋諸國との關係の緊密化に伴ひ、これに對する理解と智識とが一層強く要求されるに至つて、從來の要目に再檢討が加へられ、我國のアジヤに於ける歴史的地位を明確ならしめんことを期してなされたのであるが、今回の支那事變によつて上の要求が更に強められた。要目改正が機宜を得たことを認めると共に、その改正を主宰された著者によつて東洋史の大綱が示されたことは、國民の仰望に添ふものとして甚だ慶賀に堪へない。本書は、國史と密接な關係を有し東洋史の核心をなすべき支那史が我國を中心とする東洋史の段階に進展したる時に於て、從來の東洋史に遺憾なるものありとの著者の見界によつて、反省、檢討を經た新しい東洋史である。從來の東洋史が動もすれば徒らに地理的アジヤ全體の放漫なる記述に過ぎ或ひは支那史の叙述に意を注ぐも近代に東洋史が全アジヤを包含するに至つた經過を說くに用意を缺き、又は古代、中世に詳細にして近代の記載に至つては全く御座なりに附加するに過ぎず、末尾に我國民の使命我國民の覺悟に就き一言するも、それが更に迫力を持たなかつたのである。これは「近代の橋渡しがなければ、古代がいかに重要であつても現代を導く力を持つことはできない、東洋史の教育的價値と效果とは近代に懸つてゐる」ことに反省が足らず、近代歐米諸國の侵迫によつて東洋の形勢に大變動を起し、東洋史の核心をなす支那の思想、文化にも變革を與へ、日清、日露兩役、滿洲事變、支那事變の一聯の事象によつて、我國中心の東洋史に進展することに對して確固たる見識と周到なる論說とを缺いたゝめである。この度本書を得て欣快なるは從來の東洋史の面目が著者によつて一新されたからである。

本書は必ずしも教科書を目的として作られたのではないやうであり、振假名を用ひ、文章を平易にし說述は懇切を極めてあり、補助的說明、地名の比定、年代等を欄外に入れて本文の理解を助けるなど綿密な注意が拂はれてゐる。地圖も本文の必要個所に挿入してあるが、この方が理解を助けるためには利益があるやうに思はれる。教室に於て指示してさへ、卷末の地圖を參照する煩を厭ふ者が屢々見られるからである。理解興味のために隨所に挿畫もあり、多く出所、筆者名も明かになつてゐるが、中には興味だけで價値の少いもの（盤古氏の天地開闢圖、紂の暴政、始皇帝の焚書、坑儒の如き）も見受けられるから、可成く詳細な說明を欄外にでも欲しい。又た本書のみに限らず、著者は常に外國名の音譯に注意を拂はれるのであつて、本書に於てもガンヂーをガンヂィに、ナディール・シャーをナディル・シャーに訂正されてゐるが、尙ほ本文（頁二九八）にはナディール・シャーとある。何れにしても外國語を假名で表はすは完全を期し難いからローマナイズを併用されたらばと思ふ。これは最近代史に於て特に望ましい。

次に本書の高等學校の教科用としての場合に就て一言したい。高等學校の東洋史の總時間は約九十時間であるが、種々の學校行事のために時間をとられることあるを覺悟せねばならぬ。要目に從へば講授の配當は第一學期は南北朝の終りまで、第二學期は清代盛時の制度と文運まで、第三學期はそれ以後となつてゐるが講授の技術上のことを措いて簡單に本書三百頁を上の配當に從つて機械的に分割すれば、第一學期六十五頁第二學期百五頁、第三學期百三十頁となり、第三學期の分擔量が過多となる。「東洋の形勢、從つて世界の形勢を一變せしむべき重大な要因乃至機緣を孕んでゐる最近の東亞に於て接踵して起つた幾多の事件の經緯」の著者の試みられた「稍々詳密過ぎる程の記述」は最も喜ぶべきところであり、實に「東洋史の教育的價値と效果とは近代に懸つてゐるといつてよい」のであるが、それを扱ふべき第三學期の分擔量が過多であるとすれば、前學期の分擔量を減ぜねばならぬ。そのために何等かの工夫がないであらうか否か。今本書の構成と要目の構成とを比較するために、便宜漢代を中心とする教授事項を對照すれば

本書　　要目

中古史

第一章　秦の興亡

第二章　西漢の初世

第三章　武帝の武功、

弊政

第四章　西漢の衰滅、

東漢の興起

第五章　東漢の極盛

第六章　東漢の衰亡

第七章　三國時代

第八章　兩漢三國の文化

〔第九章、佛教及び其東傳〕

第十章　西晉時代

の如くである。近代に餘裕を殘すために要目に從つてより大きく構成を立てられることも一つの方法ではなかつたらうか。これに關連して時代區分のことであるが、著者は上古（太古至戰國）、中古（秦至南北朝）、近古（隋至五代）、中代（契丹至明）、近代（清の初政至清の外患內亂）、最近代（南京條約以後）と區分されてゐる。

三、秦漢の統一と其文化

（一）始皇帝の統一と其政治

（二）秦漢の交代

（三）漢代政治の推移

（四）漢代のアジヤ

（五）漢代の文化と社會

〔四、古代印度の文化〕

中世

一、三國、兩晉、南北朝時代と其文化

（一）三國の鼎立

（二）晉の統一と其南遷

要目には古代（支那文化の黎明至古代印度の文化）、中世（三國、兩晉、南北朝時代と其文化至明代の政治と文化）、近世（歐人の東漸とキリスト教の傳來以後）と三區分法を採つてある。東洋史殊にその核心を爲す支那史に於て西洋史の如き三區分法を採ることの謂れなく歐洲諸勢力の東漸の結果よりする近代の設定の始めて可能なるは、著者が既に「近代支那史」に於て述べられてゐるところであり、本書の序文にも「支那において、文化は周漢の古代に早く既に大成し定形してから、唐宋明清を經て殆んど著しき變化發展なく、支那の文化はエクステンション、エクスパンションあつてプログレス、デヴェロップメントなしといつてよいやうな有樣である」ことも明かにされてゐるし、古代に早く大成定形した文化がその本質を變ずる程の著しき進展なく、南京條約以後歐米の政治的、經濟的の勢力はその文化と相俟つて漸く支那の文化を變動せしめんとする傾向が顯著となり、この傾向が日清・日露兩役を經て一層促進されて、我國が東洋に於ける重大な地位、責任を有することゝなり、歷史的東洋の世界は時代により自ら廣狹の差があるが、我國が東洋史の中心

となるに至つて地理的アジヤ全體を包む東洋史の範圍が規定されることを主眼として本書の論述を進めてゐられるやうに思はれるから、三區分の如きは既に問題でなく、又東洋史殊に支那史にも西洋史の如き時代區分が成立し得るや否やの論の如きも甚だ得るところ少いと筆者も考へる。果して然りとすれば主として王朝によつて時代を限るを便とするが、而も尙ほ其間に上古、中古、近古、中代、近代の如き區分を設ける必要があるならば、その時代の特殊性を明かにし、變遷の大勢を知らしめるために、各時代の概括的な說述に就て多少の工夫を要するのではなからうか。要目の三區分に就ては要目改正の趣旨にも說明はなく深い意味があるとも思へないが、而もその中に於ては秦漢の統一と其文化、三國、兩晉、南北朝時代と其文化の如き大項を示して、時代をより大きく把握せしむべく工夫してあるやうに見える。要目に從つて構成された敎科書が高等學校に於て實施しつゝある進度表の立案に便宜があるといふやうな技術的なことを暫く措いても、東洋史に高い見識を持たれ、要目改正を主宰された著者によつて垂れられた模範は後學の甚だ尊重するものとなつたであらうかと思はれるのである。

以上は著者の近代史に重要性を持たしめる意見に全く贊成してのことであり、そのためにこそ古代、中世に時間を節約して近代に意を注ぎたい考へを表明したものに他ならぬ。然し本書の構成が要目を追つてないからとて、そのために頁數を增し過ぎたと言ふのでは決してない。本書は用意周到に且つ簡潔に筆を進めてあることは一讀すれば明かである。或ひは要目通りの事項に著者の懇切なる說明を待つたならば、失禮乍ら更に頁數を增したかも知れぬ。然しそれも喜ぶべきである。簡略に過ぎるものが實施後に效果なきことには筆者にも多少の經驗がある。こゝに於て前年の要目改正に有力に參劃された著者に、次第に重要性を增しつゝある東洋史の講述に九十時間が果して適當なりや否やに就ての御意見、中學校と高等學校との敎科の連絡等に就ての御意見を仰ぎたいのである。然し筆者は本書を敎科書として用ひた經驗は未だなく、東洋史の講授にも甚だ短い經驗しか持たず、自ら危ぶむ程の覺束ない意見しか述べ得ない。不當の點は何分の御叱正を得たい。

我國の東洋史學は甚だ盛況を呈し、專著、論文も數多く、東洋史の大系と稱するものも一二に止らないが一貫した見識の下に大綱を示した手頃の東洋史概說が甚だ少なかつた。この度史家を以て自ら任ぜられる著者によつて本書を得たことは喜ばしい限りであり、著者の近代支那史に爲された偉大な業蹟を思ふ時、本書の如き特に近代に優れた概說は他に或は容易に望み得ないかも知れない。又東洋史に適當な高等學校用の教科書の少なかつた——これは文部當局の所見である——時に本書を得たことは甚だ慶賀に堪へない。（目黑書店　貳圓六拾錢）〔增村宏〕

「大金得勝陀頌碑の研究」を讀む

大金得勝陀頌碑は漢文面の內容としては別に新しき事實なきも、たゞ本碑には女眞文の譯あるより早く學者の注意する所となり、二三の學者の研究も既に發表せられたり。然し從來の研究は皆漢文による研究にて未だ肝腎の女眞文に就ての研究あるを聞かず。此の意味に於て本誌第二卷五・六號に所載されし田村氏の研究は此の碑に就ての新研究なるのみならず、同時に又資料少き女眞語研究に一時期を劃したるものなりと云ふも過言にあらざるなり。

たゞ本碑は磨滅甚しき爲讀み得ざる文字甚多きは遺憾にて、田村氏の努力を以てしてもなほ多くの不明字あり。又氏の讀みし文字の中にも疑はしきものあり、もとより之等は此の種研究の常として、拓本により多少の意見の相違を來すは已むを得ざる所にて、特に女眞語の如き資料の極めて少きものにありては其の解讀は容易なるものにあらざるなり。余は氏の論文により啓發せられし所甚多かりしが、又同時に二三の誤讀かと思はるゝ所をも發見せり。今氣付きたるまゝに左に之を列記すべし。

Ⅰ「斡溫」は文(wên)の音譯にあらざるか。

Ⅱ「禿魯溫」、グルーベ(729)によれば緣故を「禿魯溫都言」と謂ふ。本文をみるに「禿魯溫」以下は少し離して小さく書けり。恐らく「緣故を記す」など謂ふ注解的の文ありしならむ。

Ⅵ　東余は車全とよむべきか。車の字は華夷譯語になし。全は har とよむべし。この文字は宴台碑（進士碑）にもありて、正大なる年號を譯して車全冬米と謂

へば、漢譯に對照するに恐らく「實」の字に相當するならむ。

Ⅶ 「納□林(因)必剌」は na-[ir]-in-bira とよむべきか。na は la の相通にて漢文面の來流水ならん。金梁氏滿文內府一統輿地祕圖には Lalinbira とみゆ。

(1) 畢戶は字戶にて「立つ」の意なり。卽ち文意は「高阜に出で立ち」ならん。

(2) 「斡兀迷兒」は恐らく「背□兒」にして第二字は譯語になきも漢譯を對照するに國相の女眞譯なり。國相の女眞語に就ては種々の說あれどもこの女眞文字より想像するに單に begir 或は beiler にあらざるか。

Ⅻ 未老は未老にて滿洲語 čambi に相等しく「駐蹕す」の意ならん。

ⅩⅥ 赤は「革里」とよみ「又」の意ならん。

ⅩⅧ 天拔丹未の天は tai にて太の音譯ならん。次の三字は「原」の譯にて第二十七行に宗元の元を譯して同字あれども如何によみしか音は不明なり。

ⅩⅩⅢ 夭夂は謀克の意にて、次の「塞」は複數を示す。漢文の「諸道之兵」に當るものならむ。尙これにつきては他日詳說する所あるべし。

ⅩⅩⅥ 「非兒□厄」は滿洲語にて「呪ふ」を firumbi と謂へば恐らく同字なるべし。

ⅩⅩⅦ (1) 丈兵史金中斧刈口第一の字は周の音譯にて、次の二字は明かならざれども「武」に相當する字ならむ。終りの三字は ači-in-? とよむべし。滿洲語の ačinggiyambi と同一語にて「動かす」の意なり。女眞文は「周武軍を動かす」の意ならんか。

(2) 寸兇右 上の二字は明ならざれども恐らくグルーベ(754)「稱哥剌」(受用)と同一字にて、漢譯文の「受」に相當するなるべし。

(3) 「扎□納」は jal-□-na とよむべし。「扎」はグルーベには ja と音譯したれども、滿洲語にて「命」を jalgan と云ふ。恐らくこの語と同一なるべし。

(4) この第二十七行の終りより二節目の一句は漢文の「孰云非眞」に相當す。「斡」は we にて「誰」の意なり。次の二字は意義不明なり。次の二字は se-len にて「曰」なり。次の二字は意義明ならず。恐らく「眞」の譯なるべし。最後の字は明ならざれども čien とよむ。グルーベ(707)に「非」を譯して「乖子」とあり。二字は恐らくこれと同字ならむ。

XXVIII 第五節の初め三字は fu-un-〔čę〕? にて漢譯の「遺」なり。滿洲語にて「餘」を funčen と云ふ。同一語なるべし。以上氣付きしままに列記せり。

〔安馬彌一郎〕

完顏世祖の崇天に就いて

小川裕人

金史禮志南北郊のところには、

金之郊祀本於其俗、有拜天之禮、其後太宗卽位、乃告祀天地、蓋設位而祭也、天德以後始有南北郊之制、

とあつて金の告祀天地の儀式は太宗を經て海陵時代に至つて完成された。然しその拜天の禮は建國後に至つて始つたものではなく、固有の風俗に基いたのである。金史には崇天に關する記事は世祖の時代から見え、世紀には今の敦化地方の諸部長烏春が世祖に挑戰して師を出した時の記事に、

大雨累晝夜、氷澌覆地、烏春不能進、旣而悔曰、此天也、乃引兵去、

とあり、又世祖が破多吐水の決戰に於いて、桓赧散達兄弟を敗走せしめた時の言として、

今日之捷、非天不能及此云々

とある。更に桓赧傳(卷六七)にもこの時のことを記して、

以戰勝告於天地、頒所獲於將士、各以功爲差、

とある。この後の征服戰に於いてもこの崇天思想が利用されたものゝ如く、この亂の直後に起つた盃乃(完顏氏の部と隣接した諸部長)討伐の記事(世紀)にもこのことが認められる。

完顏氏も景祖時代には衆に推されて諸部長となり(石顯傳)未だその世襲權は確立して居なかつた。然るに世祖の襲位は父景祖の意志によつて決定された(撒改傳)。世祖の初頃に起つた桓赧兄弟の大亂は、蓋し世祖の承襲に對する反抗運動に基くもので完顏氏の世襲主權はこの動亂を經て確立された。金史にこの當時より崇天に關する記事が認められるのは、完顏氏の權力の永續化とその發展に、崇天思想の與つて力のあつたことを思はせるに足るであらう。而して當時の諸部はその成立の初より異種族を含む地緣的な團體なることは拙稿「生女眞勃興過程に關する一考察」に於いて述べた如くである。